

日本靈異記 二題

虎尾 俊哉

日本靈異記の本文研究と訓読とは、周知の通り伝本が少ないうえに大変困難である。そして、伝本の新発見ということは現在あまり期待できそうにもない。とすれば、いろいろな方面から個々に気象に追求してゆく外はないということになる。その試みとして、本文の校訂に關するものと、訓読・解説に關するものとを、一例づつ提示してみたいと思う。とは言うものの、こういう作業には多大の言語学的な素養を要する。従つて、その素養に乏しい私がこういう文章を公にすることは如何にも気がひけるが、しかし、こういう努力を積み重ねる以外に途がないとすれば、この貪しい討論にも、せめて貪者の一燈程度の意味はあるかも知れない。尋常諸家の一顧を賜れることを得れば

幸であり、御叱正を賜れば望外の喜びである。

(1) 三十九話——本文校訂——

この話の中程よりやや後の處に寂仙禪師臨終の記事があるが、その箇處は奥福寺本に

帝姫天皇御世於九年。宝字二年。歲次戊戌年。寂仙禪師臨終日……

とあり、狩谷菰齋の校本日本靈異記及び同攷証、武田祐吉博士校註本（日本古典全書、昭和二十五年）とも別に問題としていない（佐藤謙三氏の校訂本は昭和十八年大戰中の刊行のためか、下巻才三十九話については「本系の本文妄説なれば此を省き、題目及訓釈のみを存す。」としてゐる）。しかし、この中ほどの「九年」二字はいかにも落着かない。試みに武田博士の訓を見ると、

帝姫の天皇の御世、九年。宝字二年……

と訓まれ、その「九年」の語分の解明を放置されたような形であり、また板橋倫行氏の訓を見ると、春陽堂版（昭和四）では

帝姫の天皇の御世の九年。宝字二年……

角川文庫本（昭和三十二年）では

帝姫の天皇の御世の九年にして宝字二年……

と訓まれ、一応の解決を試みておられる。しかし、宝字二年丙戌は孝謙天皇即位の天平勝宝元年（天平勝宝元年一己丑から数えて足かけ十年目にあたらず、満年で言えば九年と数えられない誤でもないが、天皇の治世年を表現するに際して満年を用いることは一般に行われない処である。従って、この板橋氏の解決も残念乍ら従い難いと言わなければならぬ。

とすると、当然考えられるのは誤写ということであろう。結論を先きに言えば、私は「天平」二字の誤写であろうと思う。「天」と「九」、「平」と「年」とは、共に字形が近似している。二字を双方同時に誤写したと考えることはすこし無理であろうが、先ず何れか一字を誤写し（「天年」または「九平」の形となる）、意味不通となつてから他の一字が再び誤写されたという経過を想定することは許されよう。とにかくこの「九年」を「天平」の誤写だとすれば、この箇処は

帝姫天皇御世、於天平宝字二年……

と順るスムーズに片がつくのである。「於」字もこれで同時に着着いて来るではないか。

一体、この壘異記の中で、天平宝字の年号を宝字と略した用例があるかどうか、また玄く、他の四字年号をも二字に略した用例があるかどうか、この点を改めて調べてみると、関係の事例は当面の同類たる箇処を除いて、それ以外に次の十七例がある

- | | | |
|---|----|--------|
| ① | 中々 | 天平勝宝六年 |
| ② | 〃 | 二年 |
| ③ | 10 | 天平勝宝六年 |
| ④ | 31 | 天平宝字二年 |
| ⑤ | 41 | 天平宝字三年 |
| ⑥ | 42 | 天平宝字七年 |
| ⑦ | 下7 | 天平宝字八年 |
| ⑧ | 8 | 天平神護丙午 |
| ⑨ | 9 | 神護景雲二年 |
| ⑩ | 10 | 神護景雲三年 |
| ⑪ | 14 | 神護景雲三年 |

- ⑫ 天平宝字五年
- ⑬ 天平勝宝九年
- ⑭ 天平宝字元年
- ⑮ 宝字八年
- ⑯ 天平神護元年
- ⑰ 神護景雲四年

これによって見ると、⑫と⑬の二例を除いて他のすべての四字年号は略記されていない。そして、この二つの例外の中、⑬の方は、

以^①天平勝宝元年己丑冬十二月十九日死、以^②二年庚寅夏五月七日生黒斑瘡、

の如く、実は①に接続しているもので、年号そのものが省略されているものである。従つて当面の問題については事例から除いても差支えないものである。また②は、このすこし前に⑬と⑭とが天平勝宝九年八月十八日改爲天平宝字元年、の如く、改元を示す形であり、これを受けて

又宝字八年十月……

とあるのであつて、これは確かに略記であるが、その略記の可能な条件を踏まえた上での略記であ

る。つまり、②も④も、同じ話の中に同一の年号が先行しているという条件があり、こういう条件のない他の十五例では四字年号はすべて完形で示されているのである。

従つて、靈異記においては、略記しても差支えない場合を除いて、四字年号は必ず完形で示れるので通例であると言つてよい。そこで当面の問題に返れば、この下巻第三十九話には、この箇処より前に天平宝字の年号も先行していないのであるから、ここは当然「天平宝字二年」とあるべき処なのである。少なくともこの方が靈異記の通例を破らない記し様なのである。この点から言つて、この「九年」二字を「天平」二字の誤字と見て差支えないのであるまいか。

② 中巻第二十七話——訓筆・解釈——

この中巻第二十七話は、例の元興寺の道場法師の孫の力女が、尾張国中嶋郡の大領の妻となつて、夫の大領が国守から無法に取り上げられた衣服を腕力で取返す話であるが、この力女は、夫の衣服

を取返して来た直後には、臭竹を手にとつて練糸のように細かく擧いで下う。大領の両親はこの嫌の藤子を見て大吏に、恐れ、息子の大領に「お前はの妻のために国司に怒まれて、処罰されるだらう」と言い、更に次のように言つて、結局この妻を実家に送り返すことになつた。

國司作是事各勤有哉等何作不能寝食（諸校本）
この部分の校訂そのものは誠に妥当であると思ふが、問題はこの部分の訓読と解説とにある。武田博士の訓は

國の司にすらも、かく作る事の咎、動もあらば、我等何に作む。寤食すること能はず。

で、「かくする」以下の部分は「衣服を取り返したため、もしかめがあつたら、我々はどうしよう」と解しておられる。一方、板橋氏は、かつて春陽堂版では

國司かくする事の咎め、や、もあらば我等何にせむ。寤食すること能はず。

と訓ばれたが、再川文庫本ではこれを改めて、全面的に武田博士の訓を採用しておられ、ただ末尾

を「能はじ」と改められた處を異にするだけである。その解説も註によつて見る限り、武田博士と同一である。

しかし、この訓読と解説とには、先ず文脈の上から見ての疑問がある。既に国司に怒まれて処罰されるだらうと言つた直後で、更に、この事件でもしも処罰を受けたら自分らはどうしよう、と言ふのは、文脈として成り立たない訳でもないが、すこしギクシヤクした感じである。「ややもあらば」は板橋氏の解では「万一あつたら」というのであるが、ここは万一あつたらなどのんびりしたことの言える状況ではあるまい。その直前に「國の司に怒まれ、事に行はれむ」と予想したばかりの処である。更に言えば、「國の司にすらも」という、一を以て他を類推せしめる意味の助詞が余り生きていない。空転している感じがある。

ところで、この部分については高野本の訓に

國司（千早） 作是（三合加久）
す（百十）

とあり、板橋西氏の訓はこれらの訓をそのまま取らず、これを参考としてなされたもので

あることも分る。即ち、前者については「乎」字を捨て、且つ、音仮名の順序を改めており、後者については「乎」字を捨てておられる。高野本の訓釈が絶対のものでないことは勿論であるが、この訓釈を捨てるのは、これによつては文意不通でとても訓めないという時で遅くない訳であるから、先ずはこの訓釈で訓める工夫をすべきであろう。

「国司」の訓釈「をすらにも」は訓釈の通例、助詞の類例からみて確かに問題であり、疲弊もこれについて「訓釈恐有誤字」と言っていることである。歿証 従つて、両氏が、この訓釈を捨てられたのも無理はないが、しかし、「作是」の訓釈「かくするを」までも生かせないことになるのでは一考を要するのではあるまいか。私はこの訓釈によつて、むしろよりよく文義が解明すると思うので、とにかくこの訓釈に忠実に訓んでみたい。

先ず「作是」の訓釈は「かくするを」であるから、この訓釈に忠実に従えばこの部分は下の「事咎」には続かず、「国司作是」と、ここで一たん切つて訓むべきことになる。そして、「国司」の

訓釈「をすらにも」は、国司のあとに送る助辞を示したものと見るべきである。これは訓釈の通例から見れば確かに異例であるが、もとく「国司」の二字がことさら訓釈を必要とするほどの字句ではないのであるから、その後に送る助辞を示したいということになれば、こういう形式の訓釈もあり得る訳である。本文中に書きこまれた傍訓を移したものと考えれば、この向の事情は一層よく諒解されるであろう。また、「すらに」、「すらも」という用例は多いが「すらにも」という用例は外に見当たらないようである。しかし、この「すらも」も語法として成り立たない訳ではないようであるから、取り敢えず「すらにも」と訓むことにしたい。勿論、これは国語学的な問題であつて、私の力の及ぶところではなく、従つて右の訓み方に固執する気は毛頭ない（例えは「すらも」の誤りと見る方がよいというのであれば、それに従うつもりである）。しかし、少なくとも最初の「を」捨てて了う必要は全くないと思う。即ち、「国の司をすらにも」と訓んで差支えないと思う。

のである。

とすると、この四字は

国の司をすらにも是く作るを、

と訓み、その意味は「国司をさへもこのようにやつつけるほどだから」というほどのことになろう。

これに続く部分は、両氏の通り

事の咎ややもあらば、

と訓んで差支えないが、その意味は異なつて来る。

しかし、そのことを言う前に、次の「我等何作」を先きに片づけておいた方が便宜であらう。ここ

を「我等いかにせむ」と訓んだのでは、確かに前八字と文意が統がれない。両氏が「国司作是」の部分

の訓釈をそのまま採用されなかった理由の一斑も恐らくこの辺りにあると思う。しかし、此処で

「国司作是」を「国の司をすらにもかくするを」と訓んだこと、そしてこれが一をあげて他を類推

せしめる用語・文脈であることを想起して頂きたい。そうすれば、この四字とあたかも同句の如き

「我等何作」を

我等を何に作む。

と訓むべきことがおのずと導かれて来ると思う。解説は言うまでもなく「わしらをどんな目に合わせるか分りやしない」と言う処である。

さて、前に保留した「事の咎」であるが、以上述べて来た桌から、これを「衣服奪還事件」に対する国司からの咎め」と解する必要は消滅している。もとく「咎」は非難さるべき行為、罪科に処せらるべき行為そのものを指す語で「とがめ」とは異なる。つまり、過失とか落度とかいうことである。同じ鹽興記の中で、「法華經を写し奉る女人の過失を誹りて現に口ゆがむ縁」と題する下巻第二十話に「不謗其缺」とあり、その訓釈に「缺」と見えてゐるのは、「とが」の意味をよく示していると言わなければならない。そして「ややもあらば」は訓釈に「そそともすることあらば」という別訓の示されてゐる処から見ても、「万一あれば」というより「すこしでもあれば」という処であらう。私としてはむしろこの訓をとりたいと思つてゐる。その方が、「事の咎」の「事」が「そそともすること」即ち自分らの行為―稼の行為で

はなく―を指すものであることを、明白にして呉れるからである。ただし、これは特に異を立てるほどのことではないから、訓は一応西氏のままで差支えないが、その意味は「もし自分らのする事にすこしでも落度があつたならば」ということになる。

此處で改めて始めから通して訓めは、

国の司をすらにも是く作るを、事の咎ややもあらば、我等を何に作む。

となり、その解釈は

国司をさえもこんなやつつけるほどなんだから、もしわしにすこしでも落度があるものなら、どんな目に合わせられるか知れや

しない。

というふうなことになる。だから「とても一箱には住めませんよ」ということになり、実家に送り返すことにもなる訳である。嫁の行爲によつて同時に被害を受けるのではなく、嫁の存在自体によつて直接に自分らが被害を受けることを恐れているのである。今昔物語巻二十三の第十八話には、この話が再録されていて、この両親は「我等が爲ニモ不吉也。然レバ此ノ妻ヲ送テヨ。」と言つたことになっている。これは簡に過ぎて必ずしも明確ではないが、私には、力の強い嫁からその腕力を振われることを恐れている両親の姿が読み取れるのである。